

目加田さくを先生の業績 1

【目加田さくを先生】

大正 6 年（1917）～平成 22 年（2010）

福岡県筑紫郡山家村（現筑紫野市）で生まれ、大野町（現大野城市）で育ちました。九州帝国大学（現九州大学）法文学部国文学科で、日本の古典文学を学び、福岡女子大学や梅光学院大学で教授を歴任しました。日本古典文学の女性研究者として先駆的な存在で、源氏物語をはじめ、主に平安時代の物語を中心に研究を行いました。また、若い女性研究者への積極的な支援や、幼児教育にも尽力されました。

目加田さくを先生の専門は、平安時代の物語文学の研究ですが、『花万葉』（海鳥社 1997 年刊行）では、奈良時代に作られた万葉集の解説を行っています。愛弟子の川口小夜子さんが撮った万葉集ゆかりの美しい花々の写真とともに、それらの花を詠った歌を載せ解説を付しています。

以下に、その内容のご紹介をします。



【万葉集で多く歌われた花は何でしょう】

一番多いのは桜と思われる方が多いのではないのでしょうか。なんと一番はハギです。採録された 4,500 首の歌の 139 首（題詞などを入れると 142 首）で取り上げられています。2 番目は梅で 119 首、三番目が橘で 74 首、四番目が桜で 43 首です。この時代の桜はいわゆる山桜でした。

【秋の花】

ハギ

先述のように、万葉集で最も多く歌われています。

『万葉集』では、音で「波疑」（はぎ）とか「波義」（はぎ）、漢字は「芽子・芽」と書きます。「萩」はまだ出てきません。

◇ わぎもこに こひつつあらずは あきはぎの

さきてちりぬる はなにあらましを

（弓削皇子）（巻第二一二〇）

（現代語訳）・吾妹子に 恋ひつつあらずは

秋萩の 咲きて散りぬる 花にあらましを

（口語訳）・あなたに恋ひ恋ひて居ないで、

秋萩の咲いて散ってしまう花であろうものを

◇ わがやどの はぎさきにけり あきかぜの

ふかむをまたば いととほみかも

（大伴家持）（巻第十九 四二一九）

（現代語訳）・吾やどの 萩咲きにけり 秋風の

吹かむを待たば いと遠みかも

（口語訳）・吾家の萩が咲いたよ。秋風の吹くのを待っていたら、

あまりに遠いからであろうか。

※現代語訳と口語訳は澤瀉久孝『万葉集注釈』中央公論社 昭和35年を参考